

R・ジェフリ著

『政治、女性、福利——ケーララは如何にして「モデル」となったか——』

Robin Jeffrey, *Politics, Women and Well-Being: How Kerala Became 'a Model'*, Basingstoke: Macmillan Press, 1992, xviii + 285 pp.

粟屋利江

はじめに

本書の著者は、これまでに現在のケーララ州、特に旧トラヴァンコール藩王国地域^(注1)の近現代史、政治、社会に関して数多くのすぐれた論考を発表してきた研究者である。1976年には『ナーヤル支配の没落』^(注2)という名著を世に送っている。

ケーララ州の1人当たりの国民所得は、インド全州の平均を下回り、経済的には決して「発展」しているとはいえない。ところが、他の社会指標は、ケーララ社会の「成熟」度を示している。つまり、インドの他州に比して、突出した識字率(70.4%、インド全体では36.2%)を誇るばかりか、インド全州で最低の幼児死亡率(31人、インド全体では105人)と70歳に近づく最長の平均寿命を記録している。また、発展途上国では例外的に出生率も低下傾向を示している。こうした事実は1970年代から「第三世界」の経済発展に関心を寄せる研究者、政策立案者などから注目を集め、教育や福祉政策の重視によって、人口が抑制され、ひいては高度な経済発展が即座に伴わなくとも生活水準の一定の向上がはかれるのでは、といった議論が盛んになされる状況が生まれている。いわゆる発展の「ケーララ・モデル」である。

本書はそうしたケーララへの新たな関心——1950年代にインド共産党(以下、共産党)政権の誕生によって世界の注目を集めて以来の——を背景にして、喧伝されるケーララの社会指標の数々を生みだした要因を

イギリス支配時代の社会動向までたどり、歴史的に検証しようとする試みである。

I 本書の構成と内容

著者は、「ケーララ・モデル」を論じるこれまでの議論は、ケーララの誇る社会指標を生んだいくつかの要因は指摘しても、それらを関連づける点で不十分であり、そこに欠けているのは歴史的分析であると批判する。そして、歴史的分析によってのみケーララ変貌の過程が理解できるのであり、その結果、どのような「ケーララの教訓」を引き出せるのかが明らかになる、という(6ページ)。

本書の構成は次のようになっている。

前書き

序章：モデルの形成と破壊

第1部：如何に古きケーララは崩壊したか

第2部：如何に公的政治(public politics)が根づいたか

第3部：如何に「モデル」が形づくられたか

第4部：結論

各パートともに盛り沢山のテーマが扱われており、ひとつひとつ紹介するのは紙面の都合上不可能であるので、全体をメイン・ストーリー(公的政治の拡大・進展)とサブ・ストーリー(ケーララ女性をめぐる動向)に分けて簡単に紹介する。

まず、メイン・ストーリーであるが、19~20世紀における変化の前提として、イギリス支配前・直後のケーララ社会——著者のいう「古きケーララ」——が、リジッなカースト序列と階級構造をもった社会であったことが示される。ところがイギリス支配下で、「古きケーララ」の「かなめ石」(55ページ)であった母系制が、司法制度、商品経済の進展、近代的教育の普及などによって動揺し、母系制への不満は広範なケーララ人が公共の政治舞台に出ていく最初の強いインセンティブとなった。その後も、カーストを単位とする諸組織の活動、民族運動、反藩王政府運動、社会主義・共産主義運動、農民運動が次々とケーララ民衆の政治意識を刺激し続けることになる。著者が焦点をあ

てるのは、しかし、個々の運動の性格や成果ではない。むしろ、こうした運動がケーララの民衆のあいだに、組織し抗議することを「容認された活動」(accepted activities) (109ページ) と見做し、「挑戦することの正当性」(legitimacy of challenge) (123ページ) を共有する意識を定着させていったことが重視されるのである^(注3)。それと同時に著者が強調するのは、こうした民衆の意識と組織的活動があつて初めて、ケーララにはそれらに敏感に感じる、あるいは感じざるを得ない政府が形づくられていったのだ、ということである(83, 84, 86, 161ページ)。たとえば、第2次大戦の時期にケーララを襲った食料危機に際して行なわれた配給制の体験が、民衆の要求に機敏な政府の対応の元型として挙げられている(83~87ページ)。

サブ・ストーリーは、ケーララ社会の変容過程における、女性の地位の「微妙な変化」(1ページ)である。母系制は20世紀初頭までにほぼ過去のものとなり、ケーララも父系制中心の社会へ移行する。しかし、自律性は若干失つたとしても、母系制のもとで女子が公の場に姿を現わしたり、教育を受けることに対するタブー感がインドの他地域に比して希薄であったために、ケーララでは女子の教育、専門職への進出は比較的容易に進行した。そして、ケーララの女性のこうした動向こそ、「ケーララ・モデル」を支える基本的な要素のひとつだった(高等教育を受けるために結婚年齢が高くなることは、出生率の低下に結びつく)。とはいえ、稼ぎ手として社会に出ることは歓迎されても、政治の世界では女性への風あたりは強い、という限界を著者は指摘する。

上のような歴史的検証によって、著者は「ケーララ・モデル」のメルクマールとされる社会指標(幼児死亡率の低さ、平均寿命の長さ、識字率の高さなど)を生み出したのは、「古きケーララ」の崩壊を背景にした、ケーララのユニークな近代史であるとし、ケーララの体験をどこでも再生産できるかのような、非歴史的かつ楽天的な観測に水をさす。その意味で「モデル」ではないとしても、ケーララが「教訓」を提示しているとすれば、より一般的なレベルであつて、それは政治的に活発な民衆、一定の自律性を享受する女性の存在が、民衆の福利に敏感に対応する政府をもたらす

可能性であるという(12, 217, 227ページ)。

ケーララ自身に関しては、著者は決して明るいとはいえない将来を占っている。経済的には行き詰まっている状況で、すでに生活の向上の面で大きな飛躍は望めない時点に達しており、政治的かけ引きに奔走する諸政党に選択肢は限られている。著者が望みを託すのは、これまでも人々を驚かせてきたケーララ民衆の叡知である。

II 本書の特徴と女性の問題

本書はケーララ近現代史に関して、教育、家族、政治といった、多岐にわたるテーマを実に手堅くまとめた研究書に仕上がっているといえる。個々のテーマで一冊の本になるであろうところを、今日話題になっている「ケーララ・モデル」を結接点とすることによって一気に読ませる著者の力は、高く評価されるべきである。政府の刊行物や新聞にとどまらず、マラヤラム語による小説、自伝類をふんだんに利用した本書は、情報量の点で優れているだけではない。本書が「読み物」としても魅力あるものであることも強調されなければならない。巧みで的を射た引用の数々、そして、議論の中核を指し示すエピソードがちりばめられているのである。

たとえば、「前書き」の冒頭に紹介されている、横暴な北インド人の客に対して「人間だ、犬じゃない」と言い放つ16歳ほどの給仕は、自己主張の強さ・政治意識の高さで有名な(悪名高い?)ケーララを印象づけるのにきわめて効果的といえよう。ちなみに、著者の論考「政府と文化——如何に女性がケーララの識字率を高めたか——」^(注4)でも、印象深いエピソードが導入に使われている。そこには、雨の激しく降りしきる日、バスに乗っていた著者が窓をふさいでいた分厚いカーテンを上げた時に見たのは、眼鏡をかけた年配の女性が家のヴェランダで足組みしながら熱心に朝刊を読んでいる光景だった、とあった。エピソードの印象的な挿入は、著者の得意とするところである。あるいは、視覚的イメージの効果的な使い方も特筆に値する。かつて上位カーストの前に立つ時に恭順の意を示すために使われてきた手(左手は胸に、右手は口の前

に置かれた)が、1950年代には「革命万歳」を叫びながら振りかざされる手へ。ここに、著者は彼の主張の基調である、厳しいカースト序列・差別を特徴としたケーララ社会から、抗議・要求を当然かつ好ましい態度と見做す社会への変化を反映させるのである。

19～20世紀におけるケーララ社会の変容に関して著者が提示した大きな枠組について、評者は概ね賛同する。ただし、カースト序列と階級構造——上位者への恭順——を中心に据えた「古きケーララ」のイメージには若干、静態的で図式的な印象を覚える。本書が主目的とする公正さに対する自己主張の成長の跡をたどるためには、適当な出発点ではあろうが。評者自身は、18世紀後半に、マイソール・イスラーム勢力によるケーララ北部の占領も主な契機としてかなり大きな社会変動があったのではないかと考えているが、著者の「古きケーララ」に対置するに足だけのイメージの構築とその実証ができていない状況なので、今後の課題としたい。また、「ケーララ・モデル」論を念頭に置いて本書が組み立てられていることは、議論を明快にしている一方で、「カースト」や「宗教」間の矛盾や、旧藩王国領と英領地域の矛盾などについての議論を希薄なものにしていることも否めない。著者も矛盾の存在は認めないではないが、結局は、ますます多くのケーララ人に政治参加を促した契機として問題を解消してしまうのである。

しかし、主にここで評者が取り上げようと思うのは女性の問題である。著者の「フェミニスト」的姿勢は、一読して明らかである。それはまず、各パートの冒頭に、ケーララ女性がひとりずつ取り上げられ(計4名)、彼女たちの個人史が簡単に紹介されていることに示されている。ガウリのように、1957年にケーララに誕生した共産党単独政権の大臣として、「農業関係法」の成立(ただし、1959年に共産党政権が「解放」運動によって政権から追われ、この法律は大いに薄められた)に大きく貢献し、ケーララの共産党(マルクス主義)の指導者としても有名な人物もいれば(彼女は、しかし、ごく最近党を除名された)、息子が外交官として出世することになるジャーナンマもいる。ここからは、近代ケーララ社会の変容過程における女性の在り様に多大な関心、そして共感を寄せている著者

の心情が伝わってくる。「アンナクッチィ、ラージャンマ、シャーンタ……そして彼女たちの夫たちへ」となっている本書の献辞にも、同様の思いが読み取れる。

実際、著者はケーララ人の目を政治に向かわせた最初の重要な契機として、ケーララの母系制の動揺を重視するのである。ケーララの近現代史を考える際に、母系制の存在を重視することに関して、評者に異論はない。しかし、女性の歴史への関与に関する具体的な記述となると、意外なほど乏しい。たとえば著者は、4人の女性を各パートで扱う時代、内容と呼応するよう選択しようとしたと思われるが、対応関係が感じられるのは、第1部と、第4部に限られるという印象が残る。というのも、叙述の内容が狭い意味で「政治」動向となると、やはり主役はもっぱら男性になり、紹介された女性との接点が見えなくなってしまうからである。これは、リアル・ポリティクスには、ケーララでさえ女性の参加は限定されていたという現実を反映しているのであろう。そして、すでに述べたように著者自身も、母系制の伝統があったがために、インドの他地域に比べてケーララの女性は教育を受ける権利に相対的に恵まれ、稼ぎ手として社会に出る際の障害も少なかったものの、こと政治の場となると歓迎されなかった、と繰り返し指摘している(11, 149ページ)。この結論は評者もほぼ妥当であろうと考える。

しかし、もの足りなさを感じられるのは、母系制の崩壊であれ、教育への傾倒であれ、政治参加であれ、その過程における女性自身の意識が如何なるものであったかが、不問に付されている点である。著者は、「ケーララ・モデル」の誕生に関して、ケーララ独特の、女性の相対的な自律性を重視する。このこと自体はきわめて正当である。しかし、彼女たち自身の意識を射程に入れないのであれば、母系制の存在の意義を評価するにすぎない。主体が、個々の、あるいは集団としての女性ではなく、母系制になってしまうのである。評者自身も、母系制の変容について考えた際に、制度の改革に対する男性のさまざまな思惑は文書からある程度掴めても、女性たちの意見が見えて来ず、歯痒い思いをしたので^(註5)、それを明らかにすることの困難さは承知している。しかし、家長長制的な諸条件から相対的に自由であった母系制が消滅した結果、

「1980年代までには、ケーララの女性の一部のグループは彼女たちの祖母たちより、恐らく自律性、とりわけ性的な生活に対しての自律性、を享受していなかった」(9ページ)という時、彼女たちがそのことをどう評価しているのか、やはり問われなくてはならない。近著のなかでリドゥルとジョーンは、母系制の改革・廃止を、イギリス権力と父系制グループによる、それまでケーララの女性が享受していた諸権利の否定であると強調した^(注6)。評者は、これもまた一面的な価値判断であると考え。母系制に従っていた女性自身が、(男性の)母系制「改革」論者らの主張を内面化していった側面はなかったらうか、という疑問があるからである。

本書の225ページには、諸政党の婦人部門や婦人の地域的なクラブはあっても、州単位の強固なフェミニスト組織はないとある。これはケーララ女性の誇る高い識字率を考えるならば、かなり不思議な現象である。より広く問題を捉えれば、著者は公正さを求める異議申し立て行動が正当と見做される政治文化の定着——それがかえって企業家に投資先としてケーララを忌避させ、経済的にマイナスになったとはいえ——を、19～20世紀のケーララ史を特色づけるものと強調し、「ケーララ・モデル」の基本的な要素として積極的に評価しているが、そうした潮流が女性を政治から排除したメカニズムの分析が必要であったのではないか。表現を変えれば、ケーララ社会の「政治化」の中身がより緻密に検討されなければならないように思う。著者が利用しているマラヤーラム語もしくは英語の自伝、小説類のなかに、女性の手によるものがほとんど皆無であり、今後こうした文献に丹念にあたる余地が残されている。著者には女性に焦点をあてた新書を期待したいところである^(注7)。

おわりに

本書は、ケーララ近現代史に関して総合的に、かつ「読み物」としても興味深く論じた概説書として、専門外の人間にとっても利用価値のある書である。土地改革、教育、社会改革、福祉などのテーマを個々別々にではなく有機的に扱った——本書の場合、それらを

繋ぐ糸は、公衆の政治参加、女性の地位である——研究書は他にそれほど多くはないのではなからうか。近年のフェミニスト研究の興隆をも視野に入れている点も評価されてよい。

最後に心残りの点をひとつ。著者は、本著が大部になることを避けて、参考文献を巻末に挙げるのを控えているが、豊富な一次資料と、マラヤーラム語の自伝類を含む二次資料が使われていることを考えるならば、やはり一括して提示すべきではなかったらうか^(注8)。

(注1) ケーララ州はイギリス支配時代、イギリスの直接統治する英領マラバール県と、現地の支配者がイギリスの庇護下で統治にあたった2つの藩王国(トラヴァンコールとコチン)に分かれていた。独立後の言語別州再編によって、マラヤーラム語を共有する州として1956年にケーララ州が成立した。

(注2) Robin Jeffrey, *The Decline of Nayar Dominance: Society and Politics in Travancore, 1847-1908*, New Delhi: Vikas Publishing House, 1976.

(注3) この点は表現を変えながらたびたび指摘されている。たとえば、「新たな組織形態の必要性は、結果として、マラヤーリ(マラヤーラム語を母語とする人々の意味——引用者)の多くに容認され得る新たな行動様式を伝播していった」(96ページ)。「あらゆるカースト、宗教に属するますます多くの人々が、公的な行動は必要であり、望ましく、尊敬に値する、という示威行動を始終目にしていくことになった」(126ページ)。

(注4) Robin Jeffrey, "Government and Culture: How Women Made Kerala Literate," *Pacific Affairs*, vol.60, no.3, Fall 1987.

(注5) 拙稿「英領マラバールにおける母系制(マルマッカーヤム制)の変革の動き——1896年の『マラバール婚姻法』を中心として——」(『東方学』第77号 1989年1月)。

(注6) Joanna Liddle, & Rama Joshi, *Daughters of Independence: Gender, Caste and Class in India*, New Brunswick: Rutgers University Press, 1986. 不思議なことに、著者たちは、ナーヤルなど母系制男子による、母系制改革の運動を無視している。

(注7) ちなみに、カマラ・ダース(ケーララ出身の作家。彼女の自伝は私生活を赤裸々に語ったことで話題となった)のような存在は本書のなかで位置づけられなかったらうか。彼女の生き方もまた、著者がケーララ近代史で注目する、既成の価値観への異議申し立てである

と思われるのだが。Kamala Das, *My Story*, New Delhi: Sterling Publishers 1988.

(注8) 細かいことであるが、128ページに雑誌『ミタヴァーディ』(*Mitavadi*)の発行者としてムールコー

トゥ・クマーラン(Murkkoth Kumaran)とあるが、C・クリシュナン(C. Krishnan)の誤りである。

(東京大学文学部助手)